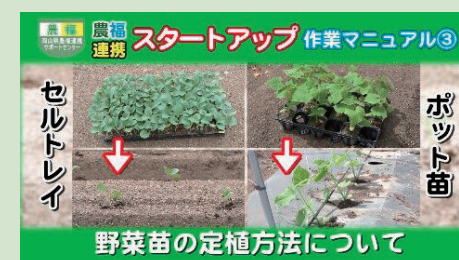


障害のある方たちが農業の現場で生き生きと活躍されている様子を動画で紹介しています



障害のある方でも農作業に取り組めるよう作業マニュアル動画を作成しました



農福連携に関するお問い合わせ

岡山県農福連携サポートセンター

〒700-0807
岡山市北区南方二丁目13-1 きらめきプラザ1階 TEL:086-222-0300

岡山県子ども・福祉部障害福祉課

〒700-8570 岡山市北区内山下二丁目4-6 TEL:086-226-7345

岡山県農林水産部農産課

〒700-8570 岡山市北区内山下二丁目4-6 TEL:086-226-7420

中国四国農政局農村振興部都市農村交流課

〒700-8532 岡山市北区下石井一丁目4-1 TEL:086-224-4511



二次元コードから
気になる動画を視聴できます
(岡山県農産課ホームページ)

農福連携 取組事例集 Ver.5



岡山県・岡山県農福連携サポートセンター

はじめに

農福連携は、障害のある人等の就労や生きがいづくりの場を生み出すだけでなく、担い手不足や高齢化が進む農業分野において、新たな働き手の確保につながる取組であると注目されています。

2024年（令和6年）6月には、政府が農福連携等推進ビジョンを改訂し、「地域で広げる」「未来に広げる」「絆を広げる」をスローガンに、地域単位での農福連携の推進体制の整備や障害のある人が働きやすい環境整備の推進のほか、11月29日を「ノウフクの日」と設定することが示されました。

今般、岡山県では農福連携の取組を広く周知するため、岡山県内で実践されている6事例について、取組概要や農福連携の効果・ポイントをまとめ、事例集を作成しました。農福連携の取組に関心を持つ農業者・福祉事業者をはじめとする皆様に参考としていただければ幸いです。

2025年（令和7年）3月

目次

はじめに・目次	1
事例集の利用に当たって	2

連携型

BCPによる高品質なスイートピー栽培と労務管理 木下農園（倉敷市船穂町）	3
複数事業所との連携による福祉主体の果樹経営 清水孝晃氏（倉敷市船穂町）	5
地域の農業者との連携による周年就労の実現 社会就労センター さくらワークヒルズ（津山市勝部）	7
施設外就労による地域連携の実践 就労継続支援B型事業所 就労支援センター きんかえも（津山市小田中）	9

福祉主体型

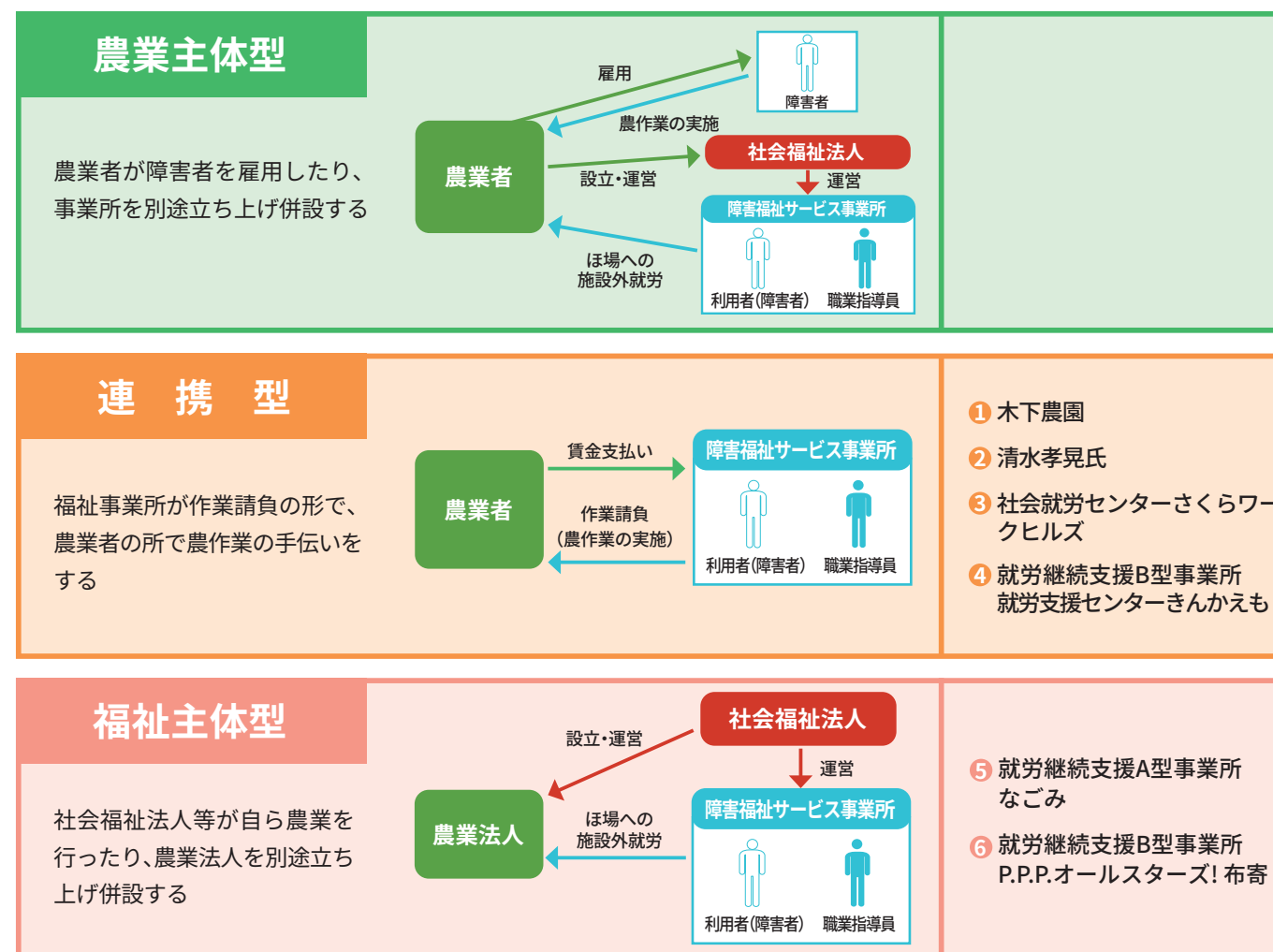
近隣農家の技術支援による野菜多品目栽培 就労継続支援A型事業所 なごみ（岡山市中区）	11
特産品開発と交流による中山間地域コミュニティ再生活動 就労継続支援B型事業所 P.P.P.オールスターズ! 布寄（高梁市成羽町）	13

事例集の利用に当たって

農福連携の取組内容は多種多様であり、取組数が増えるにつれて、取組パターンも多様化してきています。そのような状況下で、農福連携の取組主体等の違いにより、次の5つのパターンに区分されています。

- ①農業者（法人含む）が障害者を雇用、または福祉事業所を別途立ち上げ併設する「農業主体型」
- ②福祉事業所が作業請負の形で農業者を支援する「連携型」
- ③福祉作業所が農業に参入する「福祉主体型」
- ④企業が子会社を設置して農業分野で障害者を雇用する「企業出資型」
- ⑤障害者の身体・精神状態を良くするために、病院、NPO法人等で農作業を行う「園芸療法型」

本事例集では、この5つのパターンのなかで比較的多くみられ、しかも「農業」での担い手不足の解消、「福祉」での就労機会の創出と工賃（賃金）の向上が直接的に期待できる3つのパターンの事例を対象としています。



注) 1. パターンは「農福連携技術支援者育成研修」テキスト（農林水産省）を参考にした。

2. 事例調査はヒアリング調査に基づいて作成した。担当者は次のとおりである。

農研機構・西日本農業研究センター 研 究 員 中本英里：①
就実大学 経営学部 教 授 千田雅之：⑥
岡山県農福連携サポートセンター サポーター 坂本定禎：④
岡山県農福連携サポートセンター アドバイザー 桑田和哲：②、⑤
岡山県農福連携サポートセンター アドバイザー 村越好信：③

BCPによる高品質な スイートピー栽培と労務管理

木下農園（倉敷市船穂町）

視察受入れ 可

取組の契機と経過

- ①木下農園の園主は、化学メーカーに15年間勤務し研究開発に従事した経歴があった。書店で見かけた農林水産業の本を何気なく読み、農業の面白さを知り、就農に対する意識が芽生え、一念発起し就農準備を開始した。嗜好品であれば高品質な商品に対する正当で有利な評価が得られるのではないかと見込み、花き栽培を選定した。
- ②岡山県の新規就農研修を経て、2000年にスイートピー農家として起業した。受入れ地域であった船穂町がスイートピーの産地であったことが品目選定の理由である。園主は就農準備の過程で、市場調査、花卉園芸新聞、日本農業新聞、各種文献や資料を読み漁り、蓄積させた精緻な情報をもとに企画書を作成し、家族の協力を得て起業した。就農後も継続して生育、環境、出荷のデータを分析し、2023年にはおかやまIT経営力大賞を受賞した。
- ③また、リスク管理の一環としてBCP (Business Continuity Plan＝「事業継続計画」) を策定し、その成果として、昨今の気温上昇が出荷に大きく影響することが明らかとなった。スイートピーの品質向上においては、葉の成長に注視して、湿気がこもったり養分が葉に偏ったりしないよう、「下葉取り」の作業が重要になることが確認された。しかし、パート職員の時間延長や求人も難しく、これまで行っていなかった「下葉取り」ができない状況にあった。
- ④そのような中、県民局主催のセミナーで農福連携の取組を知り、岡山県農福連携サポートセンターに相談したところ、町内に所在する就労継続支援B型事業所ワークほほえみ船穂を紹介され、2023年4月の作業体験会を経て、同年10月下旬から翌年(2024年)3月中旬までの間、作業委託が実現した。

経営の概要と特徴

- ①経営耕地面積は30a（ハウス連棟が25a）あり、全て借用地(倉敷市所有)である。生産物はスイートピーのみで、2023年度は、クリスタル、ステラ、ラベンダー、サクラ、オリビア、ワイン、リンダ、パールホワイトの8品種を栽培した。流行や気候変動への適応性を勘案して品種を選定している。
- ②販路はJAの共選出荷のみであり、木下農園を含む14戸（2024年6月調査時点）の農家で構成されるJA晴れの国岡山船穂町花き部会全体では、東京、大阪市場を中心に、年間約800万本のスイートピーを出荷している。

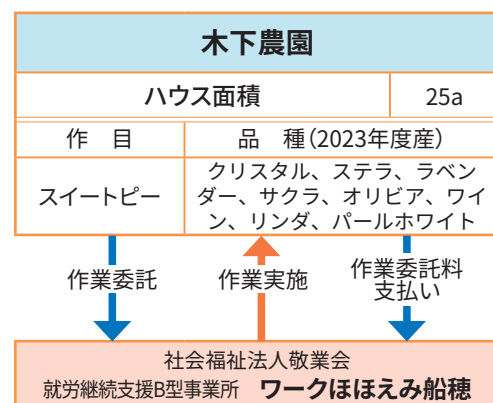


図 組織体制

ワークほほえみ船穂の声

作業指示が丁寧で分かりやすかったため、誰でも同じように作業ができました。失敗した（茎を切ってしまった）時の、木下農園さんからの「次、頑張りましょう」といった声掛けやフォローで、利用者さんは常に前向きに作業に取り組みました。

- ③木下農園の特徴は、温度やCO₂などの栽培環境の管理を行い、生育、環境、出荷データを継続的に分析し、高品質なスイートピーを安定的に出荷すること、栽培技術の改善や知識の向上を図ること、環境負荷の少ない生産を目指すことを目標として掲げ、これを実現させている点にある。BCPやスマート農業の取組は、これらを実現させる方法の一つであり、その波及的効果として、働きやすい環境、「誰もがができる」農業の環境が整備されつつある。
- ④「作業改善提案制度」も設けており、パート職員（8名）からの自発的な意見も積極的に取り入れている。採用された意見を出した職員には、特別報酬を与える

農福連携の効果とポイント

- ①下葉取りは、昨今の気温上昇を考慮すると、スイートピーの品質維持・向上を図るうえで重要な工程であり、経営内の労働力不足を考えると、ワークほほえみ船穂は欠かせない存在（労働力）となっている。また、下葉取りは、作業の成果が目に見えて分かるため、利用者にとってはやりがいを感じられやすく、木下農園にとっては評価がしやすい。
- ②出来高払いであることや作業指示が明確であること、作業範囲や休憩場所がパート職員と重ならないようルールを明確にしておいたことで、ワークほほえみ船穂にとっては、求められるものに対するアプローチの仕方が分かりやすく、気持ち良く作業ができることに繋がっている。
- ③下葉取り作業は、従来は目安棒を片手で持って印の位置を確認しながらハサミで下葉を切る作業であったが、

など、パート職員のモチベーション向上にも努めている。また、妻とは家族経営協定を締結し、役割分担や責任を明確にしている。

- ⑤スイートピーの主な栽培管理作業には、播種、かん水、つるの引き下げ、巻きつる取り、脇芽取り、下葉取り、花切りがあり、このうち、「下葉取り」をワークほほえみ船穂に作業委託している。2023年度は、10月下旬～3月中旬までの間、利用者3名と職員1名の4人体制で下葉取りを行い、その約4割をワークほほえみ船穂が担当した。なお、委託料は、パート職員の日報を基に作業実績の平均を算出したうえで作業単価を設定し、出来高払いで支払っている。

利用者（障害者）が行う際は誤って茎を切らないよう、切る葉を片手で持ってからハサミで切る必要があった。また、体験会（2023年4月）では、利用者が作業に集中する余り、残すべき上位葉まで取り除くミスも見られた。このような対策として目安棒に脚を付けて「自立型」にして、利用者が目安棒を使って作業できるようにしている。波及的な効果として、木下農園のパート職員の作業効率も向上している。

- ④誤って茎を切ってしまった場合は叱責などせず、温かい言葉を掛けて柔軟に対応した。農家側からの声掛けは利用者の作業のモチベーションに大きく影響する。木下農園によるこうした対応により、利用者は継続的に作業を前向きに行うことができ、作業精度も向上させている。

岡山県 BCP 認定制度

令和3年度認定事業者



BCPの紹介スライド（木下氏提供）



作業体験会の実施(2023年4月)



自立型目安棒を使って作業実施

下葉取りの状況
(左:作業前、右:作業後)

複数事業所との連携による 福祉主体の果樹経営

清水孝晃氏（農福連携技術支援者）（倉敷市船穂町）

視察受入れ 可

取組の契機と経過

- ①清水氏は、障害がある子どもの養育や将来設計を考えた中で、子どもと共に働ける職業として農業に注目した。2019年、妻の親戚からぶどう園を借り受けて倉敷市船穂地区で新規就農した。
- ②2020年、農林水産省と岡山県が始めた「農福連携技術支援者育成研修」の受講を契機にして、農業経営に福祉事業所との連携を取り入れることにした。
- ③2021年、ワイン用ぶどう栽培で施設外就労に取り組ん

でいる就労継続支援B型事業所に相談して、生食用ぶどう（ピオーネ老木園）の栽培管理をしてもらったところ、指導員とのコミュニケーションをとることで障害のある利用者にも作業できることが分かった。

- ④2022年以降、倉敷市内の複数の事業所に働きかけた結果、2つのA型事業所及び4つのB型事業所が管理作業全般に参加する体制が整ってきた。

清水孝晃氏			関係福祉事業所			
品種名	面積(a)	うち施設	区分	事業所名	開始	主な作業
シャインマスカット	20	20	A型	グリーンハウス水島	2022年	作業全般
瀬戸ジャイアンツ	10	5	A型	しんくら	2023年	出荷調整
アレキ	15	15	B型	フィストパンブ	2022年	作業全般
ピオーネ	15	5	B型	くらげ	2022年	草刈
オーロラブラック	10	10	B型	やさい畑クムレ	2023年	草刈
ワイン用品種	20	0	B型	みのり	2024年	作業全般
ぶどう計	90	55	B型	ワークほほえみ船穂*	2021年	作業全般
もも 10a新植予定	0	-				

作業依頼

作業実施

委託料支払い

販売先

JAぶどう部会（市場、船穂ワイナリー）

農産物直売所

直接販売

図 清水ぶどう園の品種構成と福祉事業所との関係

注*)ワークほほえみ船穂は、2021年にはピオーネ老木園で作業実施、22年は改植用の中間育苗を担当。23年以降は別のぶどう農家の作業に専念している。

経営の概要と特徴

- ①家族労働力は、本人、妻（フルタイム勤務のため休日のみ）、父親（高齢）と少なく、パート雇用も繁忙期の2名のみである。そのため、多くの作業を福祉事業所に委託しており、年間の支払い工賃は約300万円に達している。
- ②経営方針として障害者とともに働けるぶどう園を目指

しており、規模拡大による収入確保を目標としている。このため、栽培中止園を積極的に引き受け、2023年80a、24年103aと経営面積が拡大中（25年133aの予定）であり、目標は200aである。

- ③販売先は、JAぶどう部会（市場出荷、加工用）6割、農



ワークほほえみ船穂の指導員に作業方法を説明する清水氏



グリーンハウス水島の利用者による副枝管理と粒間引き

産物直売所（パック詰めが主体）3割、直売1割となっており、一般農家に比べるとパック詰めや加工用の比率が高い。

- ④出荷調整作業はハウス内で行ってきたが、今年度は試行的に収穫物を事業所に持ち帰り、調整（生育不良粒の粒間引きなど）、パック詰め、直売所への出荷をしてもらった。エアコン完備の事業所内の作業が好評であったことから、次年度からは事業所で出荷調整作業を本格的に

行ってもらう計画である。

- ⑤農福連携を継続するためには、福祉事業所との協力関係を強化したいと考えている。ぶどう栽培の作業は夏場が中心となる。このため、冬から春の作業（剪定、摘雷）が必要なもも栽培との複合化、食品加工に取り組む事業所（みのり）への加工原料の提供（ドライフルーツ、菓子類の製造）などを計画しており、加工品は来年度から販売予定である。

表 施設外就労の実施状況

作業名	摘穂	副枝管理	摘粒	袋かけ	収穫	出荷調整	パック詰め	草刈ハウス	草刈露地	堆肥入れ	剪定	剪定枝収集	参加人数(平均)		活動状況	
													利用者	指導員	日数	時間/日
作業分担	園主・家族	5	2	4	2	9	5	5	5	8	5	2				
比率	パート	3	4	4	4	-	1	-	-	-	-	-				
	福祉事業所	2	4	2	4	1	4	5	5	2	5	8				
福祉事業所	グリーンハウス水島	○	○	○	○	○	○				○	○	5	1	週4日	4
	しんくら(2023年の取組)	○	○	○	○	○	○				○	○				
	フィストパンブ		△		○	○		○		○	○	○	5	1	適時	4
	くらげ								○				3	1	月2回	4
	やさい畑クムレ					△			○				6	1	適時	3
	みのり				△	○	○	○	○				3	1	週4日	2

注1) 「○」実施、△試行中の作業を示す。

2) しんくらは、2023年から作業実施したが、24年は事業所の都合により休止、25年は再開予定である。

農福連携の効果とポイント

- ①初めてぶどうの管理作業を行う福祉事業所に作業ポイントを理解してもらうため、作業マニュアルの作成に関係者とともに積極的に取り組んできた。2022年には県作成の作業マニュアル（「枝管理（巻づる）」「脇芽処理」「袋かけ」）（※1）の作成に協力し、さらに2024年には動画マニュアル（一連の栽培管理作業）（※2）の撮影にも積極的に協力している。
- ②A型事業所サイドでも技術習得や職員間の情報共有を図るため、独自の取組を行っている。様々な作業に従事しているグリーンハウス水島では、作業ポイントを図示した作業記録を作成し、作業に同行する職員が交代しても作業レベルがばらつかないように工夫している。
- ③清水氏は、近隣の福祉事業所に積極的に働きかけ、作業に参加する事業所を増やしており、利用者のスキルに合わせて、事業所の役割を分担（棲み分け）している。

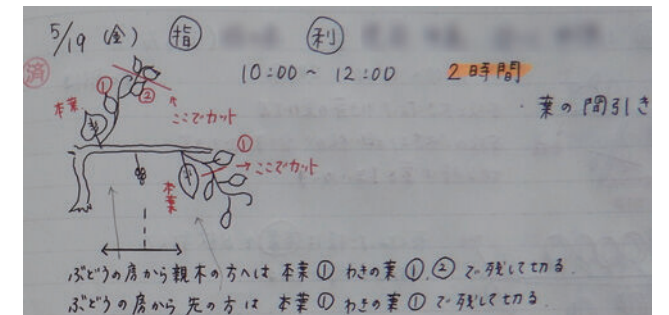
※1 岡山県農産課農福連携ページはここから



※2 岡山県備中県民局動画紹介はここから（2025年3月公開）



粒間引きの実演を行う清水氏

グリーンハウス水島の作業日誌
＜作業ポイントをイラストで記録して共有＞

地域の農業者との連携による 周年就労の実現

社会就労センター さくらワークヒルズ (津山市勝部)

<https://kyoueikai.okayama.jp>

視察受入れ 可

取組の契機と経過

- 1985年8月に社会福祉法人 共栄会を設立し、1986年に身体障害者通所授産施設 弥生授産所(1995年セルフ弥生に名称変更)を開設した。
- セルフ弥生は元々身体障害者の通所授産施設であったことから、幅広い障害者を受け入れるため隣接地に「社会就労センター さくらワークヒルズ」を2006年10月に開設した。
- さくらワークヒルズでは電気・電子部品組立て、箱折り、弁当袋成形などの企業等からの請負作業、年間定期的な介護用具の洗浄作業、焼き菓子や作州餅の小物等の製造・販売などに取り組んでいた。
- しかし、作業依頼が減少傾向であったところにコロナ禍でその減少に一層の拍車がかかっていた。そのなかで、岡山県農福連携サポートセンター主催の「農福連携農作業現地説明会」(2023年3月)に参加し、新しい分野の開拓が可能と考え2023年度から農福連携に取り組むこととした。

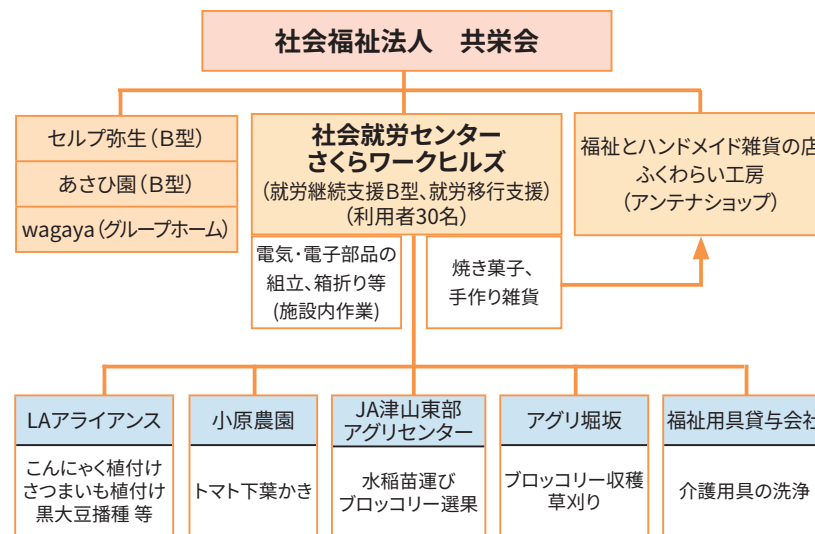


図 組織体制

経営の概要と特徴

- 岡山県農福連携サポートセンターから紹介のあった、こんにゃく・さつまいもの植え付けや施設トマトの下葉かき、ブロッコリーの収穫・選果作業等に積極的に取り組み、初年度にもかかわらず年間約90日の施設外就労を行い、周年作業体系を樹立している。
- 受託作業は基本的には、指導員の指導・監督のもとで作業を細分化し、利用者の特性に合わせて作業を分担している。例えば、さつまいも植え付けでは、植え付けが困難な人は苗を配布している。
- 機械（草刈機等）や包丁を使う作業は、職員が行うなど安全面に配慮している。
- 農福連携に意欲的に取り組めるよう、施設外就労には特別手当を支給している。
- 今後、利用者の中で作業等のアドバイスや手本を見せたり、道具を配ったり、集合等の声掛けなどを率先して行う農業リーダーの育成をするとともに、得意な作業と苦手な作業を振り分け役割分担をするなど、チームで効率よく作業が出来るように努めていくこととしている。



こんにゃくの植え付け作業



トマトの下葉かき作業

表 施設外就労の実施状況

依頼者	作 目	作業内容	作業時期(月)												備 考 (役割分担と作業上の工夫点等)
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
LAアライアンス	こんにゃく	植え付け					—								・利用者2人組で1人がハンド移植器で植え穴を開け、もう1人が種芋を入れ植え付ける ・芋の消毒、運搬は職員
	さつまいも	植え付け					—								・苗を配る者と植え付ける者の2人組で行う(植え付けが困難な人は苗配布)
		収 穫										—			・農業者が機械で掘った芋をコンテナに集め、圃場から運び出す
	黒大豆	播 種						—							・職員がマルチに穴を開け、利用者2人組で1人がハンド移植器で播種穴を開け、もう1人が種子を入れ播種する
小原農園	トマト	下葉かき	—	—	—	—	—	—			—	—	—	—	・切る位置が理解できる利用者が切り、他の者が集める
JA津山東部アグリセンター	水 稻	苗運び					—								・利用者が協力し、バケツリレーで苗箱を運ぶ
	ブロッコリー	出荷調整	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	・利用者がハサミで葉を切り揃え、職員が包丁で茎を切り揃える
アグリ堀坂	ブロッコリー	収 穫	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	・大きき基準のリンクで確認しながらカマで株を切り、下葉を切り落とす
	水稻等	草刈り						—	—	—	—	—	—	—	・職員が草刈機で刈り、利用者が集める

農福連携の効果とポイント

- 農福連携の取組により工賃が向上(農業部門で2～3割の工賃確保)し、2023年度では月額平均工賃32,096円(県平均の約1.7倍)と高い工賃を実現している。
- 2024年度から農福連携を担当する専属職員を新規に配置し、取組体制を強化している。
- 新しいことに興味を持つ利用者もあり、本人の希望を優先しながら農業に取り組む人の育成に努め、当初、利用者は3名であったが、現在は農福連携に10名程度が取り組んでいる。
- 利用者からは「やりがいがある」、「農業は開放感もあり楽しい」などの感想が聞かれ仕事の達成感を得るとともに、心身の健康管理や地域の人との交流も図れることなどから農作業を積極的に受託している。
- 施設外就労の特別手当の支給やお花見、小旅行、納涼祭、クリスマス会等の行事を月1回程度行うなどモチベーションの向上に努めている。

依頼農業者の声

◎小原農園(株) 小原社長

トマトの下葉かき作業を福祉事業所をお願いすることで従業員が他の作業に集中出来るようになり、その結果、収量や商品化率も向上して経営が安定してきました。福祉事業所は欠かせないパートナーとなっています。今後、芽かき作業など新たな作業もお願いしたいと考えています。

◎(一社)LAアライアンス(津山市内の若手農業者6人で構成) 米井さん

構成員は自身の経営もあり労働力の確保が課題です。そのため、作付計画や作業日程が急遽変更になることもありますが、柔軟に対応してくれて非常に助かっています。信頼関係ができたので、今後、圃場準備をした後の播種や移植作業などはお任せしたいと考えており、事業所の方に大いに期待しています。



ブロッコリーの出荷調整作業



黒大豆の播種作業

施設外就労による地域連携の実践

就労継続支援B型事業所 就労支援センター きんかえも (津山市小田中)

https://jagaimonoki.com

視察受入れ 可

取組の契機と経過

- ①管理者が津山市の社会福祉団体に障害者の支援活動をしていた2002年頃、家族から支援学校卒業後の支援についても強い要請を受けた。そこで、特定非営利活動法人「じゃがいもの木」を設立し、2004年4月に利用者5名で小規模事業所を開所した。
- ②地権者の事情で小規模事業所が移転することになり、同年7月に地元園芸農家の紹介で農地(現在地)を借り、栽培指導を受けながら、じゃがいも、さつまいも、たまねぎ、柿などを10a程度栽培し、地元の市場やホームセンター等で販売していた。
- ③利用者が増加するなかで制度改正等も伴い、2007年10月に就労継続支援B型事業所就労支援センター「きんかえも」を開所した。その後、施設外就労で作業を受託するとともに、じゃがいも等の生産・販売は中止した。
- ④また、利用者の共同生活援助としてグループホームを設立するとともに、自立生活支援組織も設立した。

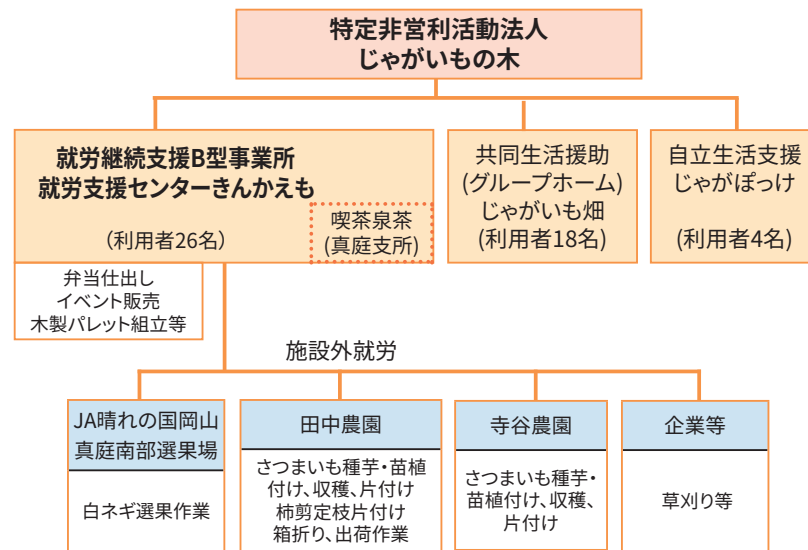


図 組織体制

経営の概要と特徴

- ①「きんかえも」では、職員7名(常勤5、非常勤2名)、利用者26名(内7名はグループホーム利用者)で、仕出し弁当の製造・販売、喫茶店(泉茶)の運営、施設外就労、木製パレットの組立等の事業を実施している。
- ②そのなかの施設外就労では、JAの選果場で週1回の白ネギの選果・箱折り作業、2戸の園芸農家のさつまいもの苗蔓(販売用)採取用種芋の植付け、種芋用の苗植付け、ハウス内での芋蔓残さの片付け、種芋収穫等の作業及び津山市内の民間企業(1社)、個人宅の草刈作業を受託している。
- ③事業収益の増大、利用者の周年的就労機会の拡大及び工賃向上を図るために、仕出し弁当を製造し、主に市内外のイベントで販売している。また、真庭市内に喫茶店を出店し、飲食も提供すると同時に、同市の委託による高齢者の見守りを兼ねた弁当を配達している。
- ④利用者は30歳代以下の若い世代で(約8割)、知的障害

が多い(約9割)ため、少人数でチームを組むとともに、各種作業の細分化・単純化により、作業負担の軽減を図っている。

- ⑤近年の特に夏季の暑さ対策として、休憩時間の増大や水分補給を十分行うよう心掛けるとともに、暑熱順化を図るため5～6月は屋外作業を心掛けている。



ハウス内でのさつまいも蔓の片付け
(事業所提供、以下同様)

- ⑥利用者のモチベーションを維持するため、各種レクリエーション(バーベキュー、ピュッフェ等の食事会、年4回の日帰り旅行)やイベント(収穫祭、植付け祭)を実施している。

- ⑦地域の春、秋祭会場の草刈り、納涼祭の場所提供と支援(テント張り・片付け等)、空家の草刈り、地域の印刷・配布物のコピー等、地域で積極的にボランティア活動等をしている。

表 施設外就労の実施状況

依頼者	作 目	作業内容	作業時期(月)												備 考 (作業上の工夫、配慮している内容等)
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
JA晴れの国岡山 真庭南部総合センター	白ネギ	選果 箱折り (週一回)	→							←					・3～4チーム(1チーム:利用者3名+職員1名)を交替で派遣する (気分を入れ替え、モチベーションの維持を図るため交替派遣) ・白ネギを拭く者と根を切る者などに作業を細分化している ・商品のネギの扱いを丁寧にしよう注意している
			→							←					
田中農園	さつまいも 種芋用	種芋植付け	↔												・2人1組になり、足の幅の間隔で種芋を並べるよう指示する ・種芋のカゴが重いので2人でカゴを持ち運んでいる ・植え付け間隔はマルチの図柄を目印にしている ・苗を渡す人と植え付ける人の2人組で行っている
		苗植付け					↔								
		芋蔓残さの 片付け						↔							
		収 穫								↔					
	柿	箱折り													・暑さ対策のため雨天時に作業し、小まめに休憩と水分を補給する ・60歳以上を除く、全員で行っている ・重労働のため、小まめに休憩している ・腐れ芋の選別が出来た人が選別している
		剪定枝片付け 出荷作業	↔									↔			
寺谷農園	さつまいも 種芋用	種芋植付け	↔												・箱折りが出来る人が空き時間で行っている ・作業は、半日程度している ・バックのラップ掛け・シール貼り、箱を梱包している ・足の幅の間隔で種芋を並べるよう指示している ・植付け間隔は、マルチの図柄を目印にしている
		苗植付け					↔								
企業等	敷地内	草刈				↔		↔		↔					・各箇所、年間3回程度である ・草刈機の使用利用者は1～2名、職員が乗用草刈機(1台)を使用する

農福連携の効果とポイント

- ①当事業所は開設当初から地元園芸農家の支援(農地貸借の斡旋、栽培指導等)を受けるなど、地元農家との連携・支援を大切にしている。
- ②利用者の障害特性に応じて作業の細分化・単純化(種芋の植付け等)し、作業を分担することで利用者1人当たりの精神・肉体的負担を軽減している。
- ③各種レクリエーションやイベントを実施し、農作業に重

- 要なチームワークの向上や利用者の長期・安定的就労のモチベーションの維持を図っている。また、作業中の休憩(特に、夏季)も多く取り入れる等、利用者への配慮と作業環境の改善に努めている。
- ④地域でのボランティア活動(春、秋祭会場の草刈り、納涼祭テント張り・片付け、高齢者の弁当配布と見守り等)によって、地域交流と地域連携を実践している。

依頼農業者 田中農園の声

各種の作業について、多人数で一生懸命に辛抱強く取り組んでもらっており、当農園の力強い戦力の一つになっている。



さつまいもの植え付け



ネギの選果作業



柿剪定枝の片付け

近隣農家の技術支援による 野菜多品目栽培

就労継続支援A型事業所 なごみ (岡山市中区)
<https://aozorakai.org/about/>

視察受入れ	可
-------	---

取組の契機と経過

- ①2009年、NPO法人あおぞら会が岡山市中区倉田で児童デイサービス事業所あおぞらと就労継続支援A型事業所なごみの事業を開始した。
- ②2015年、瀬戸内市邑久町本庄地区の農地17aを借りて、なごみ農園として野菜の多品目栽培を始めた。さらに2019年から、チンゲンサイ農家の協力によりハウス2棟を借り受けてチンゲンサイの周年栽培を始めた。同農家はなごみの指導員を兼務して職員や利用者に農作業のノウハウを指導した。
- ③2022年、瀬戸内市牛窓町長浜の農業法人への施設外就労を開始し、同法人では年間を通じて野菜栽培（ほうれん草、ナス、キュウリ、オクラ、ピーマン他）などの農作業を行なっている。

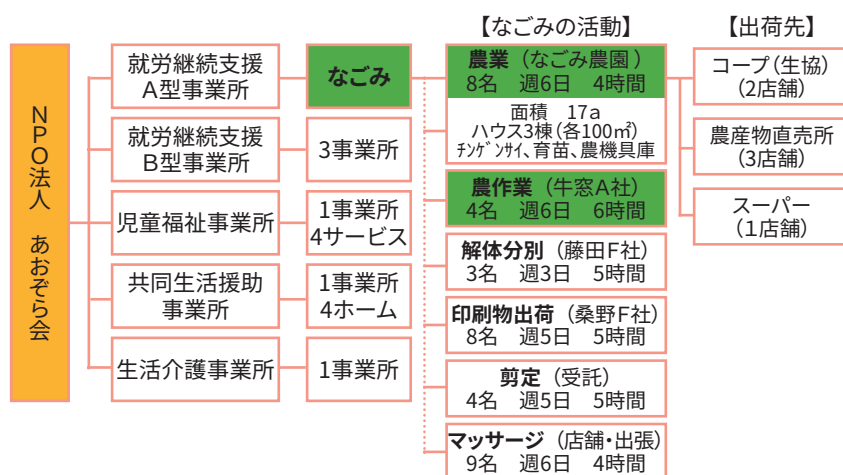


図 組織体制と主な業務内容

注)【なごみの活動】利用者数、週間勤務日数、1日の勤務時間を表示

- ④ハウスの借用は、チンゲンサイの市場価格の低迷やチンゲンサイ農家の事情もあり、2023年3月に終了した。

経営の概要と特徴

- ①なごみの活動は、本庄地区のなごみ農園(野菜の多品目栽培)、牛窓地区の農作業(施設外就労)、産業廃棄物の解体・分別(施設外就労)、印刷物出荷準備(施設外就労)、剪定(施設外就労)、マッサージ(店舗・出張)など多岐にわたっている。
- ②なごみでは、利用者36名に対して指導員11名で生産活動を行っている。利用者の勤務時間は4時間、6時間、5時間と異なり、勤務時間が短いと賃金が少なくなるが、短時間勤務を好む利用者はなごみ農園での作業を希望する場合が多い。
- ③なごみ農園のスケジュールは、9時朝礼後に移動、9時30分～13時農作業、13時30分帰所後に昼食、帰宅となっている。午後から出荷できるように、午前中の勤務時間を延長している。
- ④なごみ農園(17a)では、チンゲンサイの小型ハウス(100㎡程度)を除いて露地栽培であり、温暖な気象条件を活かして、年間を通じて多品目野菜(年間37品目、月平均15品目)を栽培している。これらを近隣の農産物直売所やスーパー直売コーナーに出荷して収益増加を図っている。また、エアコンを装備したコンテナ



なごみ農園の全景



チンゲンサイのかん水作業



チンゲンサイの播種作業



スーパー店舗内の販売コーナー

ハウスを設置して、夏場（熱中症対策）・冬場の休憩場所、出荷用野菜の一時保管場所として活用している。

⑤利用者（知的障害と精神障害が各々半数）は、表のとおりほとんどの作業が可能であり、職員の指導下で特定

の作業(セルトレイへの播種、かん水、農薬散布)ができる利用者も数名いる。なお、主に職員が行う作業はトラクター等の運転と間引き作業である。

表 なごみ農園(野菜多品目栽培)における役割分担と作業ポイント

作業名		ビニール張り	耕うん 畝立て	施肥	播種	灌水	中耕 除草	防除
使用機械・器具			トタクター 耕運機 畝立機		セルトレイ	動力ポンプ	刈払機	背負式 噴霧器
作業 分担	利用者	○	○	○	○	○	○	○
	職員	○	○	○	○	○	○	○
作業ポイント		職員の指導の下、職員と利用者が共同で作業する	1名の利用者は機械操作をしている	職員が肥料の量や施肥位置を指示して利用者とともに行う	セルトレイへの播種とは場への直播を行う	ポンプ操作、水を確認など利用者が自主的に行う	職員の指導の下、2～3名の利用者が刈払機の使用が可能である	希釈は職員、散布作業は利用者が行う

作業名		間引き	収穫	調整	計量	袋詰め 箱詰め	出荷	後片付け
使用機械・器具					上皿ばかり			
作業 分担	利用者	○	◎	◎	◎	◎	-	◎
	職員	◎	○	○	○	○	◎	○
作業ポイント		職員が主として行うが、一部の利用者も可能である	収穫量は、前日の販売状況から職員が指示する	荷姿は日々異なるので、現物で指示する	はかりの目盛りが読める利用者が担当する	野菜をマットに包んで袋詰めを行う	午前中に出荷準備を済ませて、午後職員が出荷する	利用者、職員全員で決まった場所にす

注) 「◎」は主担当、「○」は補助者、「-」は作業従事なし

農福連携の効果とポイント

- ①チンゲンサイ農家から野菜の栽培方法や出荷の荷姿などを教わり、職員の技術習得に役立った。なごみ農園の運営や牛窓地区の施設外就労に繋がっている。また、なごみ農園の地主が農機販売会社会長であったことから、農業機械や中古ハウスの確保にも協力してもらった。このようなプロの農業関係者の支援が、福祉事業者の農業参入及び継続のポイントとなっている。
 - ②利用者のスキルアップにも積極的に挑戦しており、指導員の指示に従ってトラクターや刈払機の使用、農業散布、かん水、計量作業ができる利用者がいる。生産コストを抑えるため、すべての品目で種子から栽培しており、間引きが必要な品目では職員が主に担当している。チンゲンサイなどセルトレイ育苗を行うことで間引き作業を省き、省力化も図っている。
 - ③直売所へのお荷では農福連携ということの特別扱いはない。一般出荷者よりもやや安価な価格設定と「あおぞら会ラベル」の活用により「あおぞら野菜」の認知度を高めてリピーター顧客の確保を目指している。農産物直売所へのお荷は午後からであるが、棚の取り合いがなくお客に目立つ場所を確保しやすいメリットがある。
 - ④一般就労に向けたトレーニングを意識した活動に取り組んでおり、農作業や剪定作業の経験を活かして、造園会社や企業の環境整備業務で一般就労に移行した利用者が毎年数名いる。

特産品開発と交流による 中山間地域コミュニティ再生活動

就労継続支援B型事業所 P.P.P.オールスターズ！布寄 （高梁市成羽町）

<http://www.3flower.jp>

視察受入れ 可

取組の契機と経過

①社会福祉法人P.P.P.は、倉敷市を拠点に21の事業所で高齢者介護、障害者福祉、児童発達支援事業を行っている。このうち、障害者就労支援は7つの施設で行われているが、中山間地域にあるのは布寄のみである。

②布寄地区は高梁市成羽町の中心地から約13km、標高420mの山間地に位置し、現在の住民は370名、内小学生6名の少子高齢化の進んだ地域である。

P.P.P.の理事長は布寄小学校（2012年廃校）の出身であったことから、2018年に地域創生を目的に布寄プロジェクトを立ち上げた。その一環として、「障害者と地域住民が共に働く機会や環境を創ること」を目標に、翌年グループホームと共にP.P.P.オールスターズ！布寄を開設した。

③2024年8月時点の利用者は26名、うち25名は近接するグループホームを利用している。職員は14名（管理者1名、サービス管理責任者1名、職業指導員1名、生活支援員9名）で、うち10名が農業部門を担当している。

④当初は唐辛子や薬草のかんぞう栽培に取り組んだものの上手いかず、2020年から高梁市が産地化を進めており、70円/球と高値で販売できる冬どりタマネギの

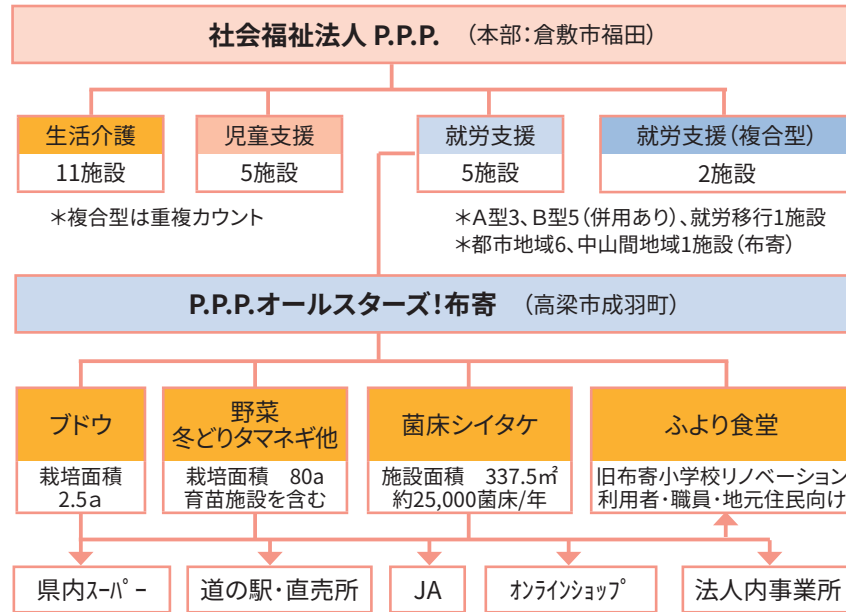


図 組織体制と販路

栽培を開始した。また、年間通じて安定した就労機会を確保するため、2023年5月から菌床シイタケ栽培を開始した。さらに、地域内外のイベントへの農作物出品、地域内外の人々の農作業の受入れ、食堂の営業、夏祭りの開催など、地域内外の人々との交流活動に積極的に取り組んでいる。

経営の概要と特徴

①冬どりタマネギは徐々に栽培面積を増やし、2024年からは経費節減のため播種と育苗も行っている。作業は手作業が多く8～9名の利用者が2～3名の職員とともに携わっている。耕耘・畝立や防除などの機械作業と選別作業は主に職員が行い、そのほかの作業は利用者が中心に行っている。育苗箱への播種（播種板を利用）は利用者の女性が担当し、ハウスへの苗箱運搬は男性が行っている。

②菌床シイタケの栽培施設は、農山漁村振興交付金（国庫）を活用して整備した。施設を有効に利用するため、菌床を移動台車に並べて栽培する。移動台車は転倒等

の危険があるため2人1組で移動させている。

③菌床シイタケの栽培には利用者12～13名（一部は他の農作業とも兼務）が職員1～2名とともに携わっている。利用者は、独自に開発した作業台車上に、菌床を置き、梱包用ビニールを切り込み、折り返し、ゴムバンドで固定して移動台車に並べる。芽かきや発芽刺激（菌床を反転してフルーツパックに載せて給水）も作業台車で行う。なお、選別・計量は主に職員が行っている。

④菌床の原価が高いため、生産性の向上と品質向上が収益を確保するうえで重要である。このため栽培マニュアルを作成し、職員は利用者に対して作業開始前に各作

業の目的と内容をホワイトボードに図解し現場で実演している。この結果、2023年度の収穫量は30kg/日であったが、2024年度は50kg/日（目標60kg）へと向上している。

⑤地元内外のイベントにも積極的に出品しPRを行うほか、規格外品の販路開拓やシイタケ粉など加工品の開発に取り組み、シイタケのブランド化と高値販売を目指

している。さらに、焼肉店、居酒屋、日本料理店、ホテルとの契約販売も模索している。

⑥現状では施設外就労は行っていないが、地域主要作目のぶどう栽培の作業支援が期待されている。近隣農家から提供されたぶどう園（2.5a）で手先の器用な利用者がぶどう栽培の技術を習得中である。今後、近隣ぶどう農家の作業支援を行いたい意向を持っている。

表 主な作目の作業内容と役割分担及び作業上の工夫、課題等

	作業内容	播種	灌水	耕耘・畝立・施肥・マルチ	定植	灌水・除草	防除	収穫	選別・出荷	片付け
冬どりタマネギ	作業時期	3月上中旬	3～8月	8月中下旬	8月下旬	9～11月		12月		
	使用機械等	セルトレイ	自動灌水機	トラクター等	手作業	ジョロ	背負動噴	手作業		
	利用者（8～9名）	◎	◎	○	◎	◎	○	◎	○	◎
	職員（2～3名）	○	○	◎	○	○	◎	○	◎	○
	作業上の工夫、技術課題	・播種板の利用、作業分担（播種時の播種は女性、育苗箱の運搬は男性、定植時の穴あけは男性、セット球の植付は女性など） ・育苗技術（発芽率等）の向上、ベト病等の防除方法の確立								
菌床シイタケ	作業内容	菌床搬入	袋カット・ゴムバンドかけ	給水・散水	収穫	選別・計量	袋詰め	出荷	芽かき・発芽刺激	
	作業時期	周年、1菌床当たり7か月利用（給水・発芽刺激から収穫まで約20日サイクルで9回発生を繰り返す）								
	使用機械	作業台車		自動灌水機	移動台車			コンテナ	フルーツパック	
	利用者（12～13名）	◎	◎	◎	◎	○	◎	◎	◎	
	職員（1～2名）	○	○	○	○	◎	○	○	○	
	作業上の工夫、技術課題	・栽培マニュアルの作成、作業開始前の作業内容とポイントの図解と実演、振り返りと作業のアップデート、作業台車の開発 ・生産性の向上（目標60kg/日、現状50kg/日）と品質（外観の良い製品率）の向上								

注「◎」は主担当、「○」は補助者

農福連携の効果とポイント

①利用者は、農作業を通じて身体を動かして生産活動に貢献するとともに、地域の祭り等で住民から必要とされることにより、笑顔が増え、心身の健康増進が図られている。

②利用者と職員あわせて40名（人口の1割強／職員5名は県外からの移住者）が過疎地域で暮らし農業等に従事すること、イベント等を通じた地域内外の人々との交流（延べ915人、うち農作業体験55名）により、農作物生

産の増加と地域コミュニティの再生が図られている。

③職業指導員は、利用者個々の適性を見極めて、各作業を利用者2～3人で行うように仕向けており、利用者の共に働く喜びや助け合う気持ち、責任感が醸成されている。

④今後の収益性及び利用者の工賃向上には、両作物（冬どりタマネギ、菌床シイタケ）の栽培技術の確立が重要な課題となっている。



冬どりタマネギの定植作業



作業台車上で作業を行った後、菌床を移動台車に並べる



規格外シイタケのブランディング商品